

サツマイモ論争の思い出

農林水産省農林水産技術会議事務局 研究統括官

なかに
中谷

まこと
誠

昔話になるが、サツマイモの科学・技術面の論争の思い出を綴ってみたい。

サツマイモの論争としてまず思い浮かぶのは、起源に関する日米論争である。1960年代から続いた長く熱い論争であった。サツマイモが新大陸起源であることは周知であったが、新大陸のどこで、どのように栽培化されたかを巡るものであった。単純化すれば日本が中米説、米国が南米説を主張し、論争が繰り返された。最終的には南米説に分があるようだ。起源地がどちらかはともかく、この論争の過程で、近縁植物の収集や分類体系の整理が進み、育種の基盤は大きく進歩したと言える。

私が農水省の研究所に就職したのは30年前であるが、その頃、強い印象を受けた論争を憶えている。当時、サツマイモの生産性は、いも自体の能力が重要であることは分かっていたが、地上部の能力がどの程度関係しているのかという論争であった。育種研究者は、「地上部なんて関係ない!」と主張し、栽培生理の研究者は「光合成をしているのは地上部だから、関係ない訳がない!」と反論し、私は大変なところに就職したと感じたことを憶えている。この論争は、育種家と生理屋の立場の違いで、かみ合わない論争だったのかも知れない。

時代が進むと、論争も紳士的になったと

感じるが、サツマイモ研究者には昔の論争スタイルが残っていたようだ。サツマイモ育種は、雑種強勢を狙う戦略で進められる。一般論としては雑種強勢を期待できるのは遠縁の交配であるが、サツマイモは元々遺伝的に雑ばくであり、近縁の交配でも雑種強勢が失われることはなく、むしろ近縁交配で優良遺伝子の集積を図る方がいいという説が出てきて、遠縁vs近縁の結構熱い論争があった。育種目標が多収性よりも紫いも品種など新需要をめざす方向に変わり、人も替わって、この論争はうやむやになってしまった。

最後は、私自身の反省の記憶である。当時、私は関東の育種責任者で、関東では、「ベニコマチ」や「ベニアズマ」など、ホクホク系の良食味品種の伝統があり、伝統に沿った育種を進めていた。食用品種の育種では、やや後発感のあった九州のリーダーは山川理さんで、しっとり系に食味のターゲットを絞った。守旧派と改革派といった文脈でしょうか。勝負は、しっとり系の勝利であった。ニーズを見つめる私の目が甘かったということである。

以上、科学技術の進展には、論争はつきものだ。最近、サツマイモ研究の周辺で熱い論争が少ないような気がする。本誌面も含め、活発な議論や論争を期待したい。